

Meet the Researcher ~私の研究者としての歩み~

「凝視めれば、愛」・・・地球へ、環境へ、そして人へ

衛生学 大槻 剛 巳

6期生として1981年に川崎医科大学を卒業して、早くも33年、漸く、血液内科を専門としていた1995年までより、1996年からの衛生学に所属してからの年数の方が、長くなってきました。とはいいいながら、実は、衛生学に所属してから数年は、血液に関連する研究もしておりましたので、実はまだまだどちらの領域に携わっていたかというところにもあります。

それはそれとして、まず、はじめにご紹介したいのは2014年5月25～27日に岡山コンベンションセンターにて第84回日本衛生学会学術総会を主催することになったことです。予防医学や衛生公衆衛生学領域では、ほかにも日本産業衛生学会や日本公衆衛生学会、日本疫学会さらに日本民族衛生学会などありますが、研究領域としては最もコアな学会の学会長を仰せつかったこと、この上ない喜びと感じるとともに、身を引き締めてしっかりと準備しないとならないと、教室員一同、プレッシャーと戦っている最中です。

特に今回は、岡山大学の公衆衛生学教授でいらっしゃる荻野景規先生が第87回日本産業衛生学会を同年5月21～24日に開催されることもあり、その週は「予防医学week in OKAYAMA」として、多くの研究者や実務の方々に岡山に集まっていたいただきたいという趣旨となっております。合同開催のシンポジウムなども企画して、種々の疾病あるいは病態、環境の問題、それぞれに実験的な、さらには疫学的なアプローチを行った研究の発表の場としたいと思っております。

ここでそのポスターを紹介します(写真1)。ご覧いただいておりますように、今回の学術総会のテーマは「凝視めれば、愛」といたしました。日本衛生学会の研究テーマは、現在、私が編集委員長も務めております英文機関誌のタイトル「Environmental Health and Preventive Medicine」そのままに環境ならびに予防医学です。そして、そうであってもmedical scienceである限り、その根底にある想いとしては、地球へ、環境へ、そして人への愛に貫かれたものであれば、という気持ちを込めてこのタイトルにしました。



写真1

た。臨床医学の種々の領域の中でも、治療については予防医学領域には入ってきませんが、生活習慣病の遺伝的素因(SNPsなども含めて)や環境(行動も含めた)の中にある危険要因の探索、あるいは病態に基づいた予防方策の検討なども衛生学の領域ですので、多くの先生にも興味を持っていただけるのではないかと考えております。昨今の、アレルギー疾患などの「衛生仮説」や、また生活習慣病の「胎児期発症説」なども、臨床とか予防医学といった枠組みを超えた、病気に対する医科学の探求の賜物と考えております。ご興味の方は、是非、ご参加いただけましたら幸いです。

と、少し来年主催する学会について、告知をさせていただきましたが、さて、自分が本項の「Meet the Researcher」として拙文を紹介させていただいてもいいのかどうかは、なんとも曖昧なところですが、

冒頭にも記しましたが、私は、本学の6期生、さらには附属高校の3期生であります。すなわち、ご多分に漏

れず、京都府福知山市で開業しておりました父親が、早く後継者になってくれという想いを込めて、倉敷に送り込んできた不肖の子どもだった訳です。にもかかわらず、実家に戻ることもなく、大学で血液内科学～衛生学の領域で、居残り続けてしまって、私が後継者として丹波の里に戻ってくることを期待していたであろう父も、5年前に逝去してしまいました（写真2）。

現在の自分は、なんでしょう、結局は父に対してその希望を叶えることのできなかったという忸怩たる想いを通奏低音の様に響かせながら、日々の業務をこなしているといったあたりが正直なところかも知れません。

ただし、父も元々、三重医専を卒業後には、生理学教室の門を叩き、基礎研究を行っていた最中、私も知らない父の父の逝去に伴って、臨床に舵取りをしたという話を聞いておりますので、せめてもの慰みは、父が成し得なかった基礎医学の研究領域での生活を、幸いにも両親や家族の理解と支援の中で、展開できているのかな、と感じられるところであります。

さて、このような経緯ですので、医学研究に最初に携わったのは、血液内科のシニアレジデント（今でいう後期研修医でしょうか）を2年修了した後に大学院に入学した時でした。28歳にして、ピペットマンもシャーレも触ったことがほとんどない（学生の時の種々の実習では、専らレポート作成役に徹していて、班の誰かが実験をする中で、きつこういう結果になるだろうから、そのとおりデータを出せよとばかりに、先に班としてのレポートを書く作業に集中していましたので、全然、実習をしていなかったのです・・時効ってことでご容赦を）者が果たして研究をちゃんとやっていけるのか不安でいっぱいでした。当時の血液内科は前の教授でいらっしゃる八幡義人先生を中心に赤血球膜の生化学的な分析で溶血性貧血について国内外でもよく知られたラボでした。ただし、そんな中で、生来のひねくれ者の性質が出たのか、あるいは、それまで2年間の病棟での診療で、やはり悪性腫瘍を診療することが多かったこともあったのか、癌研究に従事したいという想いがあって、当時、本学の実験病理学教室（故 木本哲夫教授が主宰）の助教授で難波正義先生（その後、古巣の岡山大学医学部癌源病理の教授に異動され、学部長などもお務めになられて、現在は、新見公立大学の学長に就いていらっしゃいます）が、当時の血液内科の助教授でいらっしゃる戸川 敦先生（その後、古巣の東大へお戻りになられて、その後国立医療センター血液内科部長を長くお務めでした）とご一緒に、当時としては珍しかった多発性骨髄腫の細胞株を樹立されていて、その株を使った研究をしようということをご快諾してくださいましたので、4年間の大学院生活では、骨髄腫の細胞生物学を中心に研究を行っておりました。

また、大学院の1年目から2年目にかけては、種々の事情があって、東京大学医科学研究所の病態薬理学に国内留学をいたしました。当時は、三輪史朗先生が主催されていた講座で、助教授の浅野茂隆先生（その後、教授となられ現在は早稲田大学）が展開されていた骨髄移植の臨床と基礎の研究にも携わることもできました。1年に満たない期間でしたが、倉敷に帰る期限の頃になって、浅野先生、さらには講師をされていた幸道秀樹先生（現在は都立府中病院）のお二人から「残れ、残れ、学位はきちっと作れるか



写真2 喜寿の記念に写す

ら」とお勧めいただき、図に乗って、大田区のあたりで、マンションを探して歩き回ったりしたこともありましたが（いい思い出ですが）。ただし、自分の中ですったもんだの挙句に、やはり倉敷に戻ることにして、再び松島の地での大学院生活。細胞株の樹立やあるいは遺伝子のメチル化の仕事などもしました（今、改めてトレンドになっているエピジェネティクスです）。

大学院卒業後は、再び血液内科の臨床に戻ってシニアレジデントそして講師を計3年間務め、そこから留学となりました。

1992年4月から翌年5月まではミネソタ大学血液内科で、鉄の遺伝子障害の仕事をしました。ただ、この時期は長男が生まれたり、また英語もなかなかままならずで、若干、長期の休暇的で、十分な仕事ができなかった時期でもありました。よく行ったMinneapolisのダウントウンにあるWalker Art Centerの写真を紹介します（写真3）。

その後、当初予定であったNIH（National Institutes of Health）に異動しました。National Cancer Instituteの中の病理部門、そして血液病理専門分野で、主催のDr. JaffeならびにDr. Raffeldの指導を受けながら、悪性リンパ腫の遺伝子変異について、種々の検討をしました。山ほどサザン、山ほどノザンの時代で、当時、種々の癌での癌抑制遺伝子の新たな検出や、過メチル化によるサイレンシングが脚光を集めていた時期で、このラボには米国内外を問わず本当の膨大なリンパ腫の組織サンプルが集積していたこともあって、CDK-inhibitorなどの検索をして、それでもいくつかの報告をすることができました。



写真3

また、もちろんJ-1のビザで研究生生活をしていたのですが、米国滞在が3年を超えたあたりで、当時のクリントン政権は米国内の事情もあって、なかなかJ-1ビザの延長がままならない状況が生じており、私も半年しか延長できないってことになっていました。ただ、Dr. Raffeldが、できれば、もっと長くいてくれてもいいよ、ってこともあり、また古巣である川崎医科大学の血液内科も籍がないことも分かっていたので、なんとか対応できないか、ということになって、その時にDr. Raffeldが提案してくれたのが、O-1のビザでした。この「O」はoutstandingの「O」で、業績目録や、米国での推薦者（これはDr. Raffeldが努力してくれました）、更には日本の推薦者からの数通の推薦書も集めなければならないという事態も生じました。日本では、留学前に私が樹立した骨髓腫細胞株をご供与させていただいていた愛知県がんセンター研究所の瀬戸加大先生（現在、副所長もお務めです）と、当時は広島大学原医研内科で、その後山口大学で教授をお務め（現在は開業されました）になられた骨髓腫の第一人者の河野道生先生のご推薦を頂戴することになって、一時帰国、それぞれのところを訪問して、セミナーをさせていただいたりしながら、推薦書を頂戴し（この場合に、推薦者の業績とその領域でのエキスパートであることが求められていましたので）、晴れて1995年の秋からはOビザでの就労となり、NIHの職員扱いでの給与になったりもしました。

ところが、そうこうしている1995年の秋に・・・NIHはワシントンDCの地下鉄網のうちred lineが地上に出るあたりの郊外、Maryland州Bethesdaにあります。アパートはそこから数駅北のRockvilleでした

が、いつも最寄駅の始発に乗って、ラボに行っていました。早朝、一人でラボにいると八幡教授から国際電話。衛生学の植木絢子教授（私の前任で、植木宏明前学長の奥様です。また、元々は難波先生と同じく癌源病理のご出身で、本学で実験病理教室にいらっしゃった後に、初代衛生学教授で、本学や短大の学長もお務めになられた望月義夫先生に乞われて衛生学に異動され、当時教授になられていました）が、講師候補を探していらっしゃるそうなのだが、1996年の秋から戻ってこないか、というお話でした。

いや、これも悩みました。丁度Oビザを取得したばかり、そしてDr. Raffeldも温かくも慰留して下さる中、また、40歳を迎える年齢になって、研究テーマをがらっと変えるかどうか、更には大学院や留学でその時点でも半分くらいの年数は主に研究生活をしてきていた訳ではあるにしても、本当に基礎医学の途に進むことで大丈夫か（専ら自身の自信の無さです）、などなど……。悶々とした時期がありました。

ただ、大学院や留学での研究生活がなぜか居心地が良かったこと、気持ちが楽だったことなどもあって、更には、最終的にどこかで実家に戻るのなら、一時期、衛生学という領域で研究主体の生活でも大丈夫かも知れない、さらに、そうは云っても植木教授のお仕事は珪酸やアスベストの免疫担当細胞への影響（現在も、うちの教室で継続的に研究の主体としております）でしたので、これまでのリンパ系腫瘍の研究と、近い訳ではないですが、遠すぎる程でもない、ということもあって、思い出のいっぱい残ったNIHを後にして、1996年の春に倉敷に舞い戻った次第でした。

米国生活では、日本では観たくても観れなかったJazz ~ FusionのアーティストのFestivalに行ったり、また写真にも示しますように、感謝祭にディナーにご招待してもらったりと生活を楽しめた4年間でした（写真4）。

さて、1996年から日本に戻って、日本衛生学会などに入会したのはいいのですが、これが大変。40面を下げて学術総会に出向いても、右も左も知らない人ばかり……。これは大変だあってというのが、本当に正直なところでした。

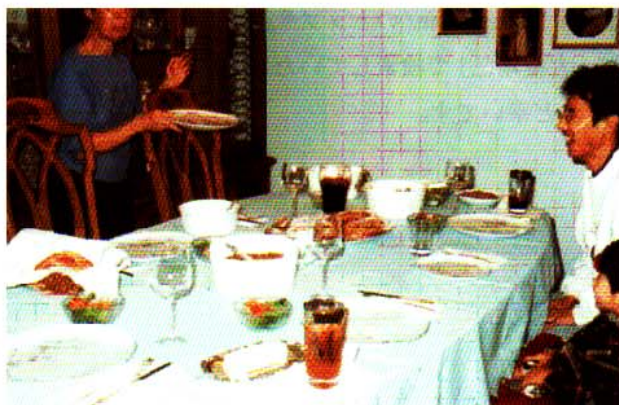


写真4

そんな中で、日本衛生学会はもちろん、日本産業衛生学会や日本免疫毒性学会など、関連する学会で、もちろん、良い発表をしていって認めてもらうことも一つですが、もう一つ、他のご発表の質疑応答の中で、如何に的確で、かつ建設的な質問をしたり意見を述べたりするか、といったことにも努力してきました。そうこうしている間に、それでも、いくつかの学会では、顔見知りも増え、また、学会活動でも（これは年齢もあってのこと

だとは思いますが）いろいろな役割を仰せつかったりすることになりました。

現在は、日本衛生学会でも日本臨床環境医学会でも編集委員長を務めさせていただいておりますし、日本免疫毒性学会では事務局をしています。これは本当に、それぞれの学会に感謝するところですし、特に学会の仕事は、会議その他で移動することも多いのですが、それでも教室の研究に直接的につながる業務だと思えば、なんとか、精一杯、精進して失敗のないようにしていこうと思っております。

日本衛生学会では、おそらくこれまでのどこかで、その年度の会長が、自分の開催する学会の中で会長



写真5

講演をするのは忙しくて大変っていう意見があったのでしょね、例年、次期会長講演が設けられ、今年の3月に私も、金沢で開催された第83回日本衛生学会学術大会で講演をしてきました。ただし、次期会長として、どうぞ会員の皆様、来年は岡山に来てくださってメッセージを伝えなければならないので、学術的な内容もさることながら、来年はこんなに面白そう、一般的に地味でやや暗いって若い研究者たちが思っている日本衛生学会を、明るく楽しい学術大会になります

よお～～って伝えたい、と思ったので、un-offical な日本衛生学会主題歌の promotion video を2本、講演の中で紹介しました。

一曲は珠玉のバラード「未来に向かって-日本衛生学会」です(写真5)。

まあぶっちゃけこれは、学会の中のある程度の年齢層以上の役職の方々に受けるであろうって思惑で作った楽曲です。

そしてもう一曲は、若手の研究者がどんどん参加してくれるようにという願いを込めて、会長自らが踊って歌うPVにしました。

「^{まも}衛る^{いのち}生命-JSH-」です(写真6)。

どちらも衛生学教室のWEB：<http://www.kawasaki-m.ac.jp/hygiene/>のトップサイトからYouTubeにリンクさせています。また、YouTubeに入っただけで「大槻剛巳」で検索していただいてもヒットします。

是非、一度(と云わず何度でも)視聴して下さいますと幸いです。



写真6